

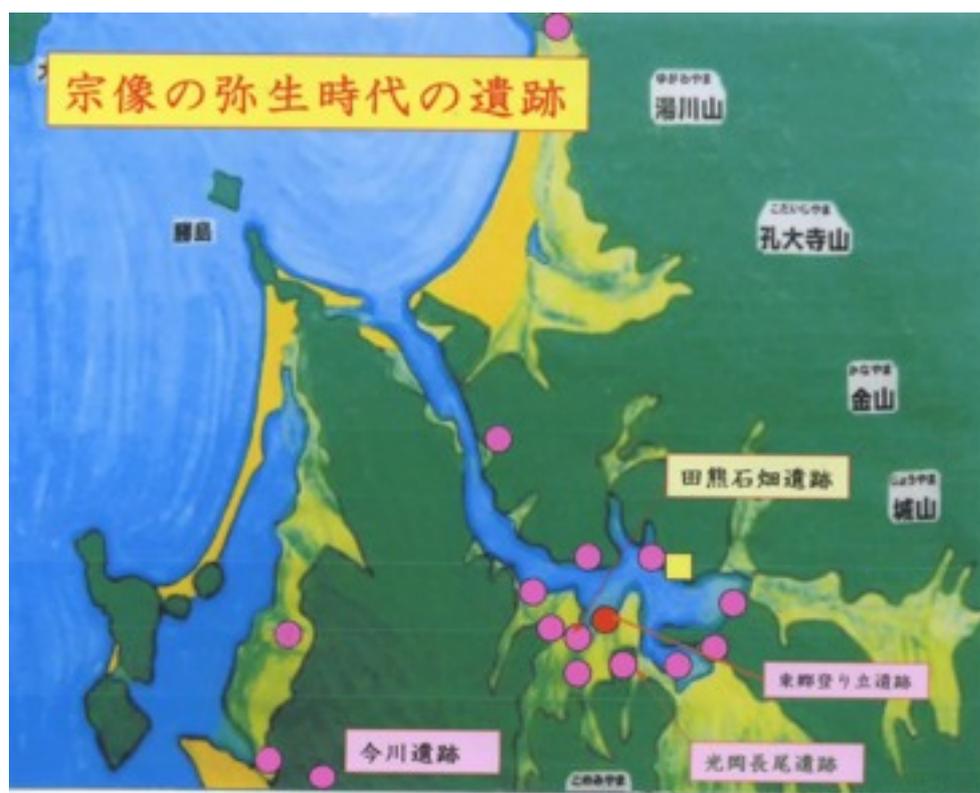
【実践ノート】

むなかたの弥生時代の人々の暮らし (2) ～ 石包丁をつくろう～

鎌田 隆徳

1.はじめに

平成22年度『子どものための郷土史講座 -第1回-』（宗像市民図書館主催）の「むなかたの弥生時代の人びとの暮らし(2)」～米づくりのはじまり、石包丁をつくろう～ で、むなかたの弥生時代の話と体験「石包丁づくり」をしました。



むなかたの弥生時代の遺跡分布図

2.むなかたの弥生時代

今から約2,300年前、むなかた平野は、まだ奥まで海が入り込んでいて、潮の満ち引きの繰り返しと古釣川の上流から少しずつ流れ運ばれてきた土砂によってできた肥沃な湿地が広がっていました。その湿地に突き出るようにのびた丘陵に、海

を渡り大陸から人びとがやって来て住みつきました。そして、人びとは米づくりをはじめました。

それは、むなかたの弥生時代のはじまりでした。その地は、現在の宗像市東郷の県立宗像高等学校のある辺りと考えられています。

東郷登り立て遺跡（とうごうのぼりたていせき）からは、約2,300年前の弥生時代はじめの頃の土器や住居を取り囲んでいたかと思われる環溝（かんこう：深いV字型の溝）など、弥生時代の最も古い人びとのくらしの跡がみつかりました。ここから周辺の丘陵へと人びとは移り住み、むなかた平野へ人びとのくらしが広がっていきました。

弥生時代中頃の初め（約2,200年前頃）になると、ムラ、ムラができ、それぞれのムラの米づくりのくらしは安定していきました。しかし、ムラのくらしが安定してくると米づくりに必要な水の確保や収穫などをめぐってムラの間でしばしば争いごとがおこりました。やがてムラ、ムラは互いに協力し合うようになり、収穫された米は一つの場所に集め、貯蔵穴（ちょぞうけつ：地面に穴を掘って米などを貯える）に共同保管するようになりました。

光岡長尾遺跡（みつおかながおいせき）では、いくつかのグループ（ムラ単位？）の貯蔵穴の周りを直径約43メートル、V字型に切り込んだ深さ3メートルもある環溝で取り囲み、出入り口は二ヶ所、そして柵を設け簡単には中に出入が出来ないよう嚴重に保管・管理がなされていました。これは、むなかたの弥生の人びとのくらしの特徴ともいえるものです。

むなかた周辺の地域（福岡、糟屋、筑豊地方）ではみることがありません。独自の文化を持ったくらしがあったようです。

田熊石畑遺跡（たぐまいしはたけいせき）からは、9基の木棺墓（もっかんぼ：木をくりぬいて作ったひつぎ）が発見されました。調査された6基の中から青銅の武器である銅剣や銅矛、銅戈の副葬品（ふくそうひん：葬られた人とともに納められたもの）として次々とみつかりました。

その数は合計15本で、弥生時代の墓からみつかった数としては日本で最多です。特に1号墓では、銅戈1本、銅剣3本も納められていました。1号墓に葬られたのはどんな人だったのでしょうか？

青銅の武器は、誰もが持つことはできません。力の強さを示すもので権威（けんい）の象徴でした。

その青銅の武器を持った首長（しゅちょう：かしら）が、ムラ、ムラをまとめ、小さなクニとして治めていたことがわかってきました。

この頃の日本について、中国の史書、漢書「地理誌」には「倭人（日本人）あり、分かれ百余国・・・」と記されています。むなかたが、その百余国の中の一つであった？とも考えられるようになりました。

弥生時代の後半（約2,000年前頃）になると、小さなクニがさらに大きなクニとして発展していったかどうかはまだわかっていません。

ただ、朝鮮半島で見られる土器などが遺跡からみつかることから、朝鮮半島の人びと深いつながりをもちながら、独自の人びとのくらしは続いたと思われています。

そして、次の古墳時代をむかえていくこととなります。

3.石包丁をつくる

3-1.弥生時代の石器

弥生時代には、米づくりに欠かすことのできない特徴的な石器がありました。前の縄文時代の石器とは使い方が異なります。

その石器とは、太型蛤刃石斧（ふとがたはまぐりばせきふ）とよばれている磨製（ませい：磨かれた）の大型の石斧です。（縄文時代は打製石斧）

柱状片刃石斧（ちゅうじょうかたはせきふ）とよばれている石斧です。

石包丁（いしぼうちょう）とよばれる石器で、石製穂摘具（せきせいほづみぐ）ともいわれています。



① 太型蛤刃石斧



② 柱状片刃石斧



③ 石包丁〔飯塚市歴史資料館〕

この3つの石器の①は、樹木の伐採、木材を割る道具、②は、木材を加工し、田の畝の土留めや水路のはめ板、木製農具などをつくる道具、③は、稲の収穫時に穂を摘む道具として、いずれも米づくりのくらしにおいて欠かせないものでした。

むなかたの遺跡からもこれらの石器はみつかっていて、人びとが使っていたことがわかっています。

3-2.石包丁をつくらう

弥生時代の米づくりでもっとも特徴的な道具、稲の穂を摘み取る石器である石包丁をつくりまします。

○ 材料と道具

・平たい石 ・石の握鋤 ・砥石 ・石錐 ・ボウル ・電気ドリル

○ つくる順序

- ① 石を割る → ② 整える → ③ 石を磨く → ④ 穴を開ける →
⑤ 刃を研ぐ そして、⑥ 試し摘み

材料の石は、当時と同じ石材を使おうと宮若市の笠置山麓の千石峡の凝灰岩や福津市恋の浦海岸、宗像市神湊海岸の岩場で採集した凝灰質砂岩を使用しました。



〔石づちで割り、形をつくる〕

水をつけ、根気強く砥石で磨く

子どもたちは、あらかじめ加工していた材料（①、②まで）の石を水で濡らし、砥石で磨くことから始めました。

・「水をつけて、力をいれ、少しずつ砥石で根気強く磨いていきましょう。刃の部分は、砥石の角度を変えて研いでいきましょう。」



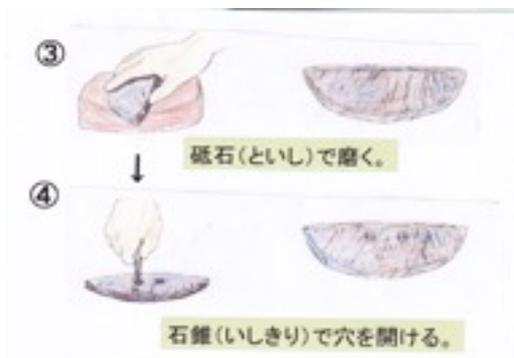
水をつけ、石錐で穴を開けていく

- ・「なかなか磨けません。手が痛くなりました。」
- ・「一生懸命にやっているから、だんだん磨かれ形が整ってきているよ。」

ある程度全体を磨きあげ、刃の部分を研ぎ終わったら、棒状の石の先を尖らせた石

錐で穴を開けていきました。

- ・「穴はどうやって開けるのですか、これで（石錐）できるのですか。」



〔石錐で穴を開ける〕



砥石で刃を研ぐ

- ・「水で濡らし、この石の錐で開けるのだよ。根気強くやってね。」
- ・「擦ってでてきた粉がポイントで、石を削り、穴を開けていくのだよ。」
- ・「なかなか開きません。」
- ・「あっ、穴が開いた！」
- ・「やったね、あとはもう一つ穴を開けて、2つの穴に麻ひもを通せば完成だね。」
- ・「麻ひもは、人差し指が入る長さでいいよ。輪っかに指を入れてしっかり握れるようにするためだよ。」
- ・「これでいいですか。やっとできました。」
- ・「完成したね。出来ばえはどうか。」
- ・「本物とそっくりだ。うまくできたね。」



〔刃を研ぎ、ひもを通し結ぶ〕



最後の仕上げ刃を研ぐ

最後に、実際、試しに摘んでみました。

- ・「切れ味はどうか。」



やっと完成！



〔摘んでみる〕



うまく摘むことができるかな？



稲穂を摘む弥生の人びと（想像図）



時期的に稲穂がないので草を摘む。

・「この時期は、稲穂がないから、稲穂に似た草で試してみましよう。うまく摘むことができるかな。」

・「秋になったら本物の稲を摘んでみましよう。」

4.おわりに

むなかたの弥生時代に関心が高まっています。田熊石畑遺跡の集団墓から出土した青銅の武器の数は、これまで考えられていました北部九州の弥生時代前期・中期

初め頃の社会の定説を覆すものでした。遺跡は国指定史跡となり、これから保存整備がなされていきます。

今回、弥生時代のくらしの基盤、米づくりで最も特徴的な道具の一つである石包丁づくりをしました。

材料の石は、当時と同じ石材を使おうと宮若市の笠置山麓の千石峡の凝灰岩や福津市恋の浦海岸、宗像市神湊海岸の岩場で採集した凝灰質砂岩を使用しました。

子どもたちは、熱心に一生懸命に石包丁づくりに取り組みました。時間の関係で仕上げの穴開けは少し文明の利器（電気ドリル）の力を借りましたが、子どもたちは、弥生の人びとと同じように砥石で石を磨き・研ぎ、石錐で穴開けるという手作業を通しながら、ちよっぴりと弥生人になり、むなかたの弥生の人びとのくらしに想いを馳せていきました。

最後に、今回の講座にあたりまして、宗像市民図書館の柴田富貴子さん、柴田やよいさんには開講、企画等で、また「むなかた歴史を学ぼう会」会長の平松秋子さんには石包丁づくりで、そして、石材加工で〔株〕「共和石材」の倉成慎司さんには大変お世話になりました。感謝申し上げます。

〔参考文献、資料〕

- 1.むなかた電子博物館 歴史・文化財・自然（2010年版）<http://d-munahaku.com/>
- 2.発見！探検！むなかた ―ふるさとの歴史― 2006年 宗像市教育委員会
- 3.宗像市史 第1巻 通史編 自然・考古 1997年 宗像市史編纂委員会
- 4.東郷登り立て遺跡調査報告書 2001年 宗像市教育委員会
- 5.概報 田熊石畑遺跡 2009年 宗像市教育委員会
- 6.ものづくりの考古学 2001年 大田区郷土博物館編
- 7.日本の歴史 原始・古代 2003年 週刊朝日百科37